

白子町の子どもたち

人間科学科3年 吉田 萌夏

大学での勉強（教育への取り組み）を踏まえ、本調査では、学童や小学校での授業の様子、子どもたちとの触れ合いの中で子どもたちの様子を見てきた。

本章では、その時に感じた子どもたちの様子を述べてゆく。1では学童での触れ合いから感じたこと、2では南白亀小学校に一日授業参観をして感じたこと、3では白潟小学校での研究授業で感じたことを述べていく。

1. 学童

学童に行くと子どもは本当にすぐに私たちに馴染んでしまった。本当に元気がいっぱいの子もいればおとなしい子もいる。逆に私たちと初対面であることから、そのような自分を演じている子もいるのかもしれない。

ドッジボールやビーズ、カードゲームに人形

遊びなど、遊びものはなんでもそろっているし、遊び相手も幅広いタイプの子がそろっている。

でも私の中でどうしてもしっくりこないのが、「外には出ない」というところである。誰もが外で遊びたがらないのだ。素朴に疑問に感じ、一人の子に「外ではあそばないの？」と質問を試してみた。すると返ってきた答えは「外で遊びたいけど、外は危ないから出ちゃいけないって言われている」とのことであった。不審者や、交通安全の面での心配があり、制限せざるを得ない状況だ。しかし、外で遊びたい気持ちを子ども自身は持っているのに、そうできないというのはそんなに大きなきっかけになる出来事があったのだろうか。学童では指導員が子どもたちを見守っている役割なのだから、外に連れ出して安全を確認していればいいのではないかと考えてしまう。学童の建物の中での運動はやは

り限界があるし、むしろ建物の中だから危ない場合も多々ある、想定もできるだろう。

2. 南白亀小学校

実際にTTや少人数授業を参観させていただくために、南白亀小学校を訪問した。4日目には白潟小学校へ、研究授業の参観をした。

まず、南白亀では、1時間目から5時間目まで授業を見させていただいた。

1時間目「1年生TT」割とみんなまじめに授業に参加していたように感じた。ただ、先生が話している最中にも話し続けている子や、少しの立ち歩きが見られた。その際は補助の先生が素早く対応し、授業はあまり立ち止まることなく、スムーズに進んでいた。

2時間目「運動会全校練習」運動会を2週間後に控えたこの日、全校練習が校庭で行われた。とても印象深かったのは、先生がマイクを使わずに全校生徒に指示を出していた点である。首都圏では見られない光景である。集団の規模が小さく、少し大きな声で話せば先生の声が全員に届く。この環境こそ、小規模校の最大の良いところである。

また、6年生の団長が自分のチームの1〜6年生をまとめていた。並ぶ時にも積極的に指示を出し、先生が指示を出さなくても上級生がま

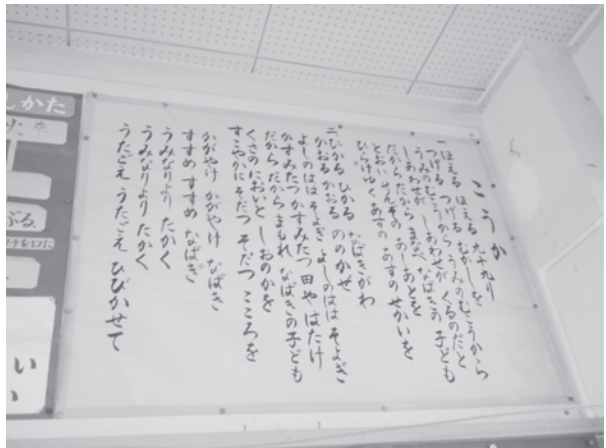


写真1.南白亀小学校校歌
(2009年9月 吉田撮影)

とめあげているところが頼もしく見えた。縦割りりがしっかりしているだけあり、上級生が下級生の面倒をしっかりと見ているなという印象を受けた。

2時間目のあとは20分間の休み時間である。ほぼ全員が外に残り、元氣よく走りまわったり、ドッチボールを楽しんでいた。

休み時間は全員紅白帽をかぶって外で遊ぶというのが決まりである。紅白帽は、1年生が赤、2年生以上は白だ。そのように1年生を注目さ



写真2.南白亀小学校3年生教室
(2009年9月 吉田撮影)

せるのは、次の2つの理由からだという。

①学校生活に不慣れなため注意してほしい

②積極的に声をかけて仲良くしてあげてほしい

このような仕組みを作ることで学年を超えた交流も生まれるのだという。実際に見ている中で、ドッチボールの白帽子の中に赤帽子が一人だけいたり、白帽子と赤帽子が一緒に虫取りをしていたり、赤帽子の子は校庭の全域にわたっており、1年生だけで集まって遊んでいる様子は見て取れなかった。4年生の子と話している



写真3.南白亀小学校校庭
(2009年9月 吉田撮影)

ときに聞いた話では、全校の子どもたちは、学年の全員のことを知っており、全員の名前も覚えているようだ。学年間の壁がなく、子どもの中でも横だけでなく縦の関係も大切にしている様子だった。

また、校長先生もジャージに着替え、子どもたちに混ざってドッチボールをしているところを目にした。校長先生は休み時間の度にジャージに着替え外で子どもたちと一緒に遊んでいるのだという。

3時間目「高学年組み体操練習」今度は体育館で、組み体操の練習を見学させてもらった。高学年と聞いていたので5・6年生の種目かと考えていたら、4・5・6年生が一緒に行うそうだ。3学年が一緒に組み体操を行うことで、人数が増え、迫力が増すのだろう。

そのなかで、「できない子」「できる子」という存在に気付いた。できない子は一生懸命に頑張っているがやっぱり失敗してしまう。しかし、その子の横には必ずできる子がいて、できるように助けていた。このような助け合いも自然とできてしまうところがまた南白亀小学校の児童としての良いところなのではないかと感じた。

4時間目「6年生少人数 算数」やはりさすが6年生といった感じで、とても落ち着いている。最初に見たのが1年生だからということはあると思うが、同じ小学生でもこんなに違うのかと痛感した。わかる問題には積極的に手を挙げて回答していく。高校生や大学生になると、手を挙げて発言する人はほとんどいないので、積極的に授業に参加する姿はむしろ私たちのほうが感心してしまった。

昼休みは実際に私たちも外に出て子どもたちと一緒に遊んだ。初めて見た人にも関わらず、みんな警戒心など全く持っていないようで、こちらから話しかける前に話しかけてくる。先生も「とっても人なつっこい子どもたち」だと教えてくださったのだが、これほどとは思っていなかった。

昼休みの延長で掃除の時間。昼休みに一緒に遊んでいた子にそのまま連れて行かれたので、掃除を手伝うことになった。ここでも子どもたちのパワフルさを見せられた。掃除をしているのか、遊んでいるのかわからない。でもちゃんと片付いているので掃除にはなっている。このように、子どもは遊びを自分たちで見つけるのが上手だ。どんなことでも自分たちで楽しめ

たを見つけ、楽しみながら取り組んでいく姿を見て、ここでも感心してしまった。

5時間目「5年生少人数 算数」6年生とは違い元気いっぱいだという印象が強い。5年生は人数がほかの学年に比べて人数が多いので、少人数の算数の授業では3クラスに分かれる。分け方は平均的な成績になるように先生が割り振ったようだ。少人数級のクラスの編成方法はいくつかあるそうだが、元気いっぱいの5年生の算数の授業を一番うまく行うにはこの方法がよいという判断だろう。

実際に3クラス全部を見て回ったが、どのクラスも先生が一人一人を見て回る時間が取れており、本当に細かく指導が行き届いているように感じた。しかし、どのクラスにも先生の話を遮って話し続ける子のように緊張感がない子もおり、先生が手をこまねいている子がいるようである。

この学年では、教頭先生が担当しているクラスもあった。管理職クラスの先生が実際に現場で教育に携わるといのはとても良いことだと考える。それは校長先生が休み時間の度に遊びに外に出るのと同じことだといえる。

5時間目が終わると、低学年の下校の時間である。私たちはこの「下校」に立ち会うことができた。まずは学年ごとに整列して、いない人がいないかの確認を行う。全員集まったら挨拶をして、順番に並んで下校になる。その時、校長先生が校門前で一人一人にハイタッチをしていた。それを見たときの感動は一生忘れられないだろう。

みんなが歩いて帰る中ときどき親が車で迎えに来る姿も見受けられた。学校からの帰りに迎えに来るなんて信じられないと感じてしまった

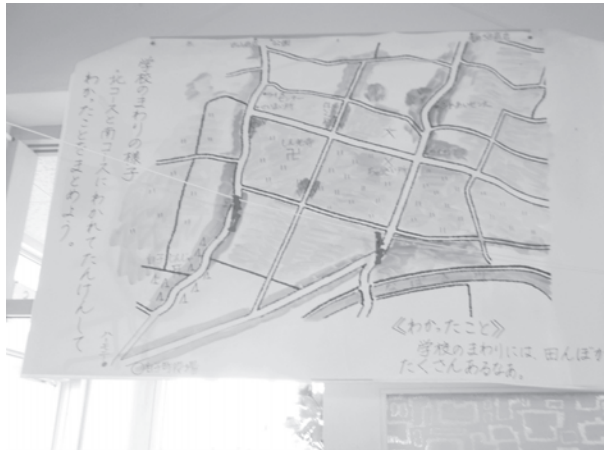


写真4.南白亀小学校周辺地図
(2009年9月吉田撮影)

が、そのような現実があるのもまた事実である。家から学校までが遠い、交通事故や不審者への心配からである。しかし、保護者の中にはむしろ、そのように車で送り迎えをするのをやめるように呼びかけてほしいなどと学校に話をしたという方もいる。なので、もちろんそうして送り迎えをする親は少数派だ。これからの学校の課題は、やはりこの「送り迎えをする親とどう向き合っていくか」ということなのではないだろうか。



写真5.元気なばきっず!と共に
(2009年9月吉田撮影)

3. 白濁小学校

この日は校内研究授業ということだった。

2時間目「1年生TT 算数」南白亀小学校で見たときも1年生のTTであったので、授業を見ている中で違いを感じてしまった。まずは、人数が白濁小学校のほうが多い中でTTであるということだ。そして南白亀小学校での授業時より多動な子が多いように感じた。おしゃべりが止まらないだけでなく、立ち歩く子どもも見られた。補助の先生はその動きの多い1人の子につきつきり状態である。

TTの良いところは2人の先生が授業を見ることでみんなに目が届き、きめ細やかな授業ができるということなのだ。補助の先生の存在が非常にもったいないように感じた。このクラスでは多動な一人の子に補助の先生が一人つき、担任の先生がほかの全員に目を配らなければいけないという状況だからだ。

一人の子につきつきりにならないければ20人程度のクラスの人数を2人で分担して、先生一人当たり見る児童の人数は10人程度で、細かく目を配ることができるであろう。

3時間目「3年生TT 算数」こちらは1年生とは違いみんながしっかりと授業に参加して

いた。研究授業で後ろで10人以上の大人に見られているのだから、子どもも緊張するのはよくわかる。本当に緊張感が伝わってくる授業であった。手が上がったり、先生から指名をしたり、かなりスムーズに授業が進行していた。担当の先生も補助の先生も一人一人を見て回る時間があり、その時間にはみんな真剣にテキストに向かっている。TTはこのような授業を目指しているのだなと感じる授業であった。いつもこのような授業を行っているのなら、全員にきめ細かい指導が行き届いているのではないのだろうか。

以上のように3校の子どもたちとの触れ合いのなかで、感じたのは、

- ①子どもたちの人懐こさ
- ②子どもの持つ可能性の大きさ
- ③先生との仲の良さ

の大きく3つである。以下に具体的に述べてゆく。

①の人懐こさはまずは学童で、遊んでいるうちに会えるのは今日だけじゃないような気になつてきた子どもが「明日は何時にくるの?」と聞いてきたときに感じた。さらに南白亀小学校

での子どもたちの初めて会う人への対応を見ていてそう感じた。

②の可能性の大きさは遊びから感じた。子どもの大人にはない純粹さは興味だけで行動を起すことがある。なので、ある行動の中でも楽しみながらできるように行動を自分たち流に作り直してしまう。そのような姿からそう考えた。少人数学級で、自分の意見を人の前で発表する機会の多さは、人に自分の考え出した新しい遊びや、いつもと違う楽しくする工夫などを人に伝える力をつけたのだと考える。

③の先生との仲の良さは、授業の中で感じた。授業中に先生は子どもを呼ぶ時には必ず下の名前と呼ぶ。どの学校も、どの学年もそうだ。そのように小さなことだけれど、子どもと距離を縮めるには最適だと思う。子どもも先生を信頼するようになる、気軽にわからない問題を質問したりできるようになるだろう。そして、先生と仲が良いということはそれだけその先生が子どもに働きかけをしている、関わっている、見ているということである。担任を持つていない先生でも、TTなどで仲良くなることもあるであろう。先生は信頼関係があるとないとではやはりやる気も変わらなと思う。